

イチゴ畑で ニオウシメジ

吹春俊光



ニオウシメジの前で記念撮影

2000年の10月、千葉市内でまたニオウシメジが発生した。場所は大網街道沿いの千葉市内。現場はイチゴの施設栽培をしているところ。イチゴを植えてあるハウスから毎年多量にでるイチゴの葉、そしてイチゴ苗床用の糞殻（を黒く焼いたもの）等を地面に孔を掘って沢山埋めた場所から発



ニオウシメジを撮る準備をする大作さん

生していた。発見者は相馬房子さん、それをうけて中村元一さんから博物館に連絡をいただいた。

和名は今関六也先生の命名で「仁王占地」中米、アジア、アフリカの熱帯を中心に発生する熱帯性のきのこで、1912年にインド産のものが記載され、日本では1981年に熊本県、種子島、沖

素敵な三脚

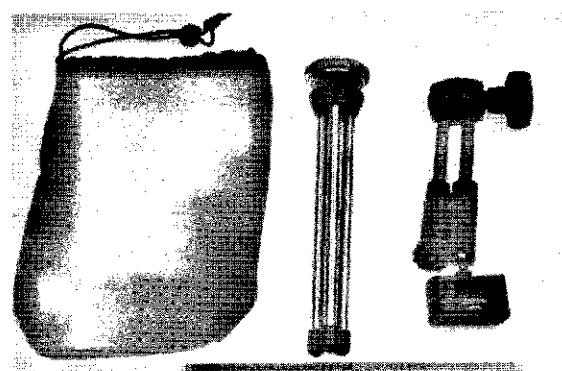


写真1／脚部とヘッド部（折り畳んだ状態）

会員の池田和加男さんの手づくり三脚をご紹介いたします。三脚の命は、1) カメラを立てたときの安定感、2) ガタツキのなさ、そして3) コンパクトさ。それを全部備えたのがこの三脚です。

脚部と自由雲台のようなヘッド部から成っており（写真1）、脚部を組み立て（写真2）、雲台を載せると（写真3）、かなり自由度の高い三脚となります。何かの工作機械の部品らしく、ネジ部がとてもしっかりと締まり、カメラを載せたときのがたつきが全くありません（編）。



大作さん作風の証拠写真

縄産の標本により日本新産としてはじめて紹介された。その後、神奈川県、栃木県などの各地で見つかっており、県内では八千代市、千葉市、山武郡などからの発生が知られている。過去の例だと大きな子実体の下には、養分となる有機物（廃材など）が多く埋もれており、竹を数百本が埋めた場所（1991年八千代市）、造園用の廃材を大量に埋めた跡（1993年千葉市）、山を開墾したあのスギの植林地（1996年千葉市）などからの発生が知られている。沖縄ではサトウキビ畑から発生することが知られている。栽培化されており、若く新鮮なものはどんな料理にもあう食用き



美月ちゃんとニオウシメジ

のこの王様でもある。

学名は *Tricholoma giganteum* とされてきたが、最近の研究によりこの仲間を *Macrocybe* 属として独立させることになった。柄の鱗片、菌核の有無、子実体の色、などで 6 種以上に分けられており、日本産のものは縁シスチジアの有無などにより 2 種以上があると考えられている。（*Mycologia* 90(3) 1998. pp.494-504.)

発生場所の脇のイチゴ農家の加藤芳子さんには写真撮影などでお世話になりました。

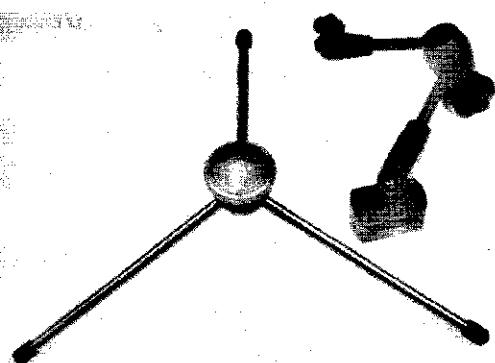


写真2／開いた脚部とヘッド部

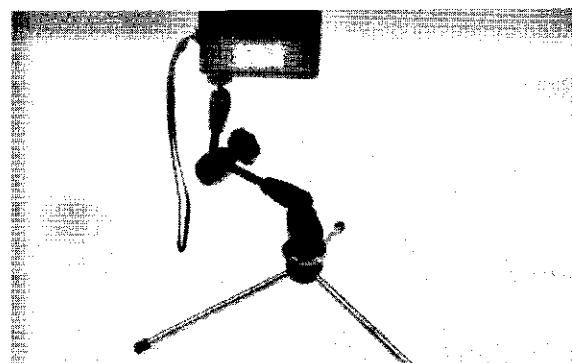


写真3／ヘッド部を脚部に乗せてカメラをセット